図画工作科

松田由美子
谷本克典

1　図画工作科における集団で学ぶよさ

(1)　私たちと造形とのかかわり

生活のさまざまな場において、私たちは身のまわりにある造形（形と色で構成される全てのもの）と密接な関係をもっている。例えば、町中の緑に心奪われたり、今日着る服のデザインや色を選んだりしている。つまり、目前の造形からよさや美しさを感じたり、よさや美しさを感じる色や形でものを選んだり、組み合わせたりすることで造形について考え、表現（行為をも含める）しているのである。この造形に働きかけられ、働きかける双方向の関係を私たちは「造形とのかかわり」ととらえることとした。

(2)　造形とのかかわりと図画工作科の学び

造形とのかかわりは、「何に、そして、どのようによさや美しさを感じるかという造形に対する価値観」と、「自らの価値観に合うものをいかにつくっていくかを考え、表現するという創造性」に支えられている。つまり、より豊かに造形とのかかわりをつくり出すためには、造形に対する価値観を広げ、創造性を培うことが不可欠なのである。

そこで、私たちは図画工作科の本質を“造形に対する価値観を広げ、創造性を培うこと”ととらえ、研究を進めてきた。

子どもが「ひと・もの・こと」に出会い、その出会いを自分の内なる思いや考えに重ね合わせた時、造形とのかかわりが生まれてくる。そのもののよさや美しさなどを自分なりに感じ、よりよく、より美しくするためにどう働きかけようかと考えはじめ、自分ならではの造形活動に取り組み、追求していく。その中でのさまざまな材料や用具に全身でくり返しかかわる体験は、ものの特性や造形的なよさや美しさへの気づきを促し、自分ならではの表現方法を子どもの内に醸成する。

そして、「造形の世界はいいなぁ」という（自分にとって）美的なものを愛好する思いや身のまわりの造形にかかわり続けようとする思いも生まれてくるであろう。

つまり、子ども一人一人が、自ら“感じ、考え、表現する”という造形活動を通して、より豊かに新しい造形とのかかわりをつくり出していくことが図画工作科の学びであるといえる。

(3)　図画工作科における集団で学ぶよさ

図画工作科の本質である「造形に対する価値観を広げ　創造性を培うこと」は、造形に対する生涯にわたる個の主体的で連続した営みである。この営みの一過程を図画工作科が担うことになる。

造形とのかかわりは、子ども一人一人にとって、自由であり、大きく開かれたものである。しかし、造形とのかかわりをより豊かで新しいものにしていくためには、多くの価値観、多くの表現と出会うことが重要になる。図画工作科で集団で学ぶよさとは、より多く価値観や表現と出会うことができることであると考える。

子どもは、自らの感覚を働かせ、よさや美しさという造形的な価値を見出していく。そして既存の価値観をもとに「ああいう美しさの感じ方もあるのだ」という他のいろいろな価値観との出会いを繰り返す中で、造形に対する価値観をさらに広げていく。

こうして広がった価値観をもとに、子どもは自らの創造性を駆使して「自分にとって新しいもの（表現）」や「自分ならではのもの（表現）」をつくりだしていく。「自分にとって新しいもの（表現）」とは、「これまでの自分」をふり返り、様々な表現との出会いを通して、自らの表現がどう変容してきたかを認識し、再構成することである。リフレッシュされた新しい自分で新たに造形とのかかわりをつくることへとつながっていく。

そして、「自分ならではのもの（表現）」は、より多くのもの（表現）とのかかわりの中でこそ光輝き、そのよさが相互に作用し合いながら、集団として造形に対する価値観が広がり、昇華していく。

つまり、一人一人の価値観や創造性が集団としての造形に対する価値観を広げ、そして創造性を培っていく。この繰り返しの過程の中で、より豊かで新しい造形とのかかわりがつくり出されていく。

こうしたより豊かで新しい造形とのかかわりをつくっていこうとする姿は、生涯にわたり学び続ける人への育ちに、そして「ひと・もの・こと」とのよりよいかかわりを大切にしようとする人への育ちにつながっていくであろう。

2　集団で学ぶよさが息づく授業へのアプローチ

(1)　学びのシェアとのかかわりから

図画工作科においては次の４つの場を通して学びを分かち合い、共有することができると考えている。

❶既存の価値観をもとに造形に働きかけ、何をすべきか見つける場

出会った造形のよさや美しさ、働きかける行為そのものの楽しさや行為の結果、生まれるよさや美しさを十分に感じられるようにすることが大切である。目の前の造形から、感じたことを話し合ったり、自分だったらこうしたいなど

自分なりの造形とのかかわりを表出し合ったりする場を設けていく。その場で子どもは他者の価値観と出会い、表現の多様性に触れ、それを認め吟味しながら、表現する楽しさへの期待を膨らませていくであろう。そして、自分ならば何をどのようにつくるか探求する活動が始まっていくと考える。

❷自分の表したいことに合わせて発想し、構想を練り、自分らしい表現をする（課題解決する）場

表現の自分らしさは、一人一人の価値観や創造性の表れである。その表れは、主題であったり、表し方であったり、行為であったり様々である。そこで、子どもと共に教師もそれぞれの“自分らしさ”に共感し、子どもがより積極的に表現にとりくめるように学習環境を整える。

例えば、一人一人の表現のための時間や空間を保障すること、自分の表したいことに合わせて材料や用具の扱い方を提示すること、表したいことに必要な材料を自由に使える環境を整えることである。

そして、思いや意図を把握し、それぞれの“自分らしさ”が集団で認められるようにすることを大切にしていく。表現の過程での一人一人の悩みや提案を広め、受け入れることを通して、共に造形との新しいかかわりをつくり上げていこうとする集団づくりを心がけていく。

❸自分の価値観と他の様々な価値観を関連づけて、自分なりに新しい価値観を広げる場

表現活動は、部分的な単純作業に陥りやすい。そこで、自分らしい表現に向けた新しい課題を見つけることができるよう、表現活動の過程で、自分の表現を見つめ直す場を設ける。最初に発想し、構想してきたことと比べてどうなのか、部分だけではなく全体としてみた場合どうなのかなど、一人一人がその後の表現活動の指針となるものをもつことができるようにしていく。また、互いの作品を鑑賞する機会を適宜設け、互いのよさや表し方の工夫について、認め合い、アドバイスし合う中で、友だちの表現からも自分の表現にはないよさや美しさといった価値に気づくようにしていきたい。このようにより多くの価値観と表現とかかわり合うことは、豊かで新しい造形とのかかわりを育むことを促すと考えている。

❹自らをふり返り、自分の価値観の広がりや創造性の高まりを認識する場

子どもが、より豊かな新しい造形とのかかわりをつくり上げるためには、自分らしい表現を追求していく（してきた）姿をふり返り、見つめ直すことで自己の学びに納得することが大切である。自らの価値観の広がりや創造性の高まりを感じること、そして、その要因を探ることができるように自己評価活動を取り入れる。

その方法として、ふり返りカードや作品カード、作品の写真（途中過程も含めて）などを用いて、自らの“感じたこと、考えたこと、表現したこと”を記録していく。

自己評価活動を通し、表現の過程の中に点在する自分らしい表現のよさを見つけたり、悩んでいたことや共につくり上げた喜び、変わった自分をふり返ったりしながら、自らの価値観の広がりや創造性の高まりを明らかにしていく。

それらを交流し、よさや新しい造形とのかかわりをつくり上げることができた要因について話し合う中で、集団で学ぶよさを味わえるようにしていきたい。

こうした活動は、学びの成就感や自分の表現を大切にする心情をいっそう高め、自分らしい表現をした喜びと新たな自分との出会いへとつながっていくと考える。そうすることで、新たな造形とのかかわりをつくっていこうとする意欲も喚起できると考えている。

これらの場は、それぞれが独立する場でもあり、互いに関係し合う場でもある。題材や学習の流れによっては、ある場が繰り返されたり、不連続にジャンプしたりすることもあるだろう。それを位置づけ、価値づけていくことで、子ども自身がそれぞれの場で、自分のもてる力を駆使して学習対象である「ひと・もの・こと」にかかわっていけると考えている。

(2) 規範とのかかわり

集団で学ぶよさを一人一人が実感できるようにするために、また、図画工作科の学びを高めるために以下の４つの点を大切にしながら学びをつくり上げていく。

- 造形に働きかけようとすること
- 価値観や表現の多様性を楽しむこと
- 材料や用具の特性やよさを生かすこと
- 学びを生活につなげること

これらは、図画工作科の学びのプロセスの中で、また、他教科とも連動し育まれていくものである。そして、子どもたちが日々生活する場でも育まれていくものであろう。つぶやきや表現に没頭している姿など、授業の中で子どもの発言や姿、表現に隠れているこれらの大切にしたいことを初めは教師が、そして子どもが、位置づけ、認め、広め、これらの価値が学びのプロセスの中で見出されるよう促していきたい。

個や集団の姿を常にこの４つの点につなげながら、表現することを、人とかかわることを、その結果高まっていく自分や仲間の存在を楽しむことができるようにしていきたい。

これらの大切にしたいことは、図画工作科から離れても、意欲的に「ひと・もの・こと」にかかわり、かかわりを楽しみ、自らを高めていこうとする子どもの学びの姿へとつながるものであると考えている。

3　実践例　－４年－

本題材以前の子どもの実態を「学びのシェアとのかかわり」「図画工作科における規範とのかかわり」「教師の手立てと子どもの変容」を視点に明らかにしたい。「学びのシェアとのかかわり」「図画工作科における規範とのかかわり」については、４月当初の子どもの実態を述べる。また、「教師の手立てと子どもの変容」には子どもの実態をふまえて行ってきた手立てと子どもの変容について述べていくことにする。

「学びのシェアとのかかわり」

学びに対する意欲はとても高く、一人一人が学習材とかかわり、自分なりに考えようとする姿が印象的であった。しかし、その学びの姿は「自分－教師」というかかわりがほとんどであった。疑問に感じたことや分からないこと、自分の考えなどの発言は多くが教師に向けたものであり、全体へ向けて発信し、話し合い、疑問や考えを共有しようという集団での学びの意識は弱いと感じた。集団で同じ時間を過ごしながらも、実は一人一人がバラバラであり、学びが高まらない状況であった。その要因として、そうした学びの経験の不足、友達とのかかわりの希薄さがあるのではないかと考えた。

「図画工作科における規範とのかかわり」

つくりながら発想を広げ、つくることを楽しむ姿が多く見られた。しかし、価値観や表現の多様性を楽しみ、自らの表現に生かしていこうという意識には弱いものがあった。そして、自分ならではの表現に向けて材料や用具のよさを生かすという点についても、試行錯誤してよりよい材料の選択や組み合わせをしたり、用具を使用したりする姿は一部の子に限られたものであった。また、図画工作科の学びと生活がつながっていることを意識している子は少ない状況であった。

「教師の手立てと子どもの変容」

学びのシェアを意識し、「みんなで学ぶ」ことのよさを感じ取れるようにするためには、他教科でも集団で学ぶよさを多く経験する必要があると考えた。そこで、授業中の仲間とのかかわりそのものやかかわりから得たことのよさを感じとることができるように「かかわりのこと」という項目を設けて毎時間ふりかえりを行ってきた。また、子どもの学びの中で集団を意識した言動を教師が認め、評価することを重ねてきた。そうした他を意識した発言や行動を板書や掲示に位置づけながら、「みんなで学ぶよさ」を感じ取ることができるようにしてきた。これらを繰り返し行うことで「みんなで学ぶよさ」をつくるために大切にしたいことを少しずつ子どもは意識するようになってきたと感じている（表１）。

○：考え方・みんなで学ぶ学び方にかかわって
　・具体的な姿

○いつも相手を意識する
　・返事をする　話す相手の方を見て話す
　　最後まで話す　言葉にこだわって話す
　　こだわって聴く　「みなさんどうですか」
　　アイコンタクト　確認する　間　速さ
　　声の大小　リズム　実際に見せながら話す
○自分の考えや思いを声にする
　・「賛成です」「同じです」「違っていて」
　　「～なのでもう一度言ってください」
○これまでの経験をもとに考える
　・「例えば～」
○知っていることから考える
○もし、自分だったら…と考える
○つなげて考える
　・「～さんにつけ加えて」「他に～」
○立場をはっきりさせて考える
○訳をはっきりさせて
○比べて考える
○手を挙げて質問する
○変わった自分に気づく
○今の自分を知る

表１　これまで子どもとつくりあげてきた
“大切にしたいこと”６月29日現在

また、小集団での学習を多く設定したり、１学期間同じ生活班で過ごすようにしたり、一人一人のよさ見つけを行ったりしながら、相互理解を深め、仲間意識を高める手立てを行ってきた。

図画工作科の授業では、相互鑑賞の場を多く設け、「誰の」「何に」「どんなことを感じたか」「それはどうしてか」という項目を設け、ふりかえりカードに記述したり、毎時間の初めに相互鑑賞から得たよさをもとにめあてを立てて、製作に取り組むといったことを繰り返し行った。そして、学級通信などを用いて、他の子の思いを広めたり、生活の中にも図画工作科の学びが息づくよう意識しながら様々な活動を行ってきた。

こうした手立てを経て、子どもは、少しずつではあるが「みんなで学ぶ」よさを感じ、そのよさを生かしながら学習に取り組むようになってきた。この土台の上に「造形に働きかけようとすること」「価値観や表現の多様性を楽しむこと」を大切にしながら、“自分ならでは”のイメージをもち、それを広め、比べ、取り入れながら、自分や仲間の学びを高めていくよさを実感できるようにと願い、本実践を構成した。

(1) 題材名　ダンス！グルルチュ！ダンス！　（心を伝える）

(2) 目　標

・「ダンス」「グルルチュ」という言葉から発想を広げて、楽しくダンスする想像上の動物を考え、関節での折れ曲がりやひねり、表情を部分の動きに焦点を当てて、様々な角度から形を確かめながらつくることができる。
・粘土の特徴を生かし、楽しみながら、ひねり出しによる形づくりや、部分と部分の丈夫な接合ができる。

(3) 図画工作科としての学びと教室の規範にかかわって

本題材は、「ダンス」「グルルチュ」という言葉から発想を広げて、自分なりの想像上の動物を粘土を用いて様子に合う動作を考え、様々な角度から形を確かめながらつくる学習である。

これまで、子どもは、立体の作品をつくったり見たりするとき「どこから見ても美しい」を大切にしながら学習を進めてきた。粘土における製作では、ゆめのどうぶつをつくったり、どこから見ても美しいタワーをつくったりしてきている。そこでは、粘土の可塑性を楽しんだり、部分にこだわった形づくりや安定のある形づくりをしたり、しっかりとした接合に気をつけたりしながらつくる経験をしてきた。

本題材では、これまでの学習をもとに、全体の形のイメージをもち、ひとかたまりの粘土からそのイメージにあった量で、脚、手、頭、尾などをひねり出し、どこから見ても楽しそうで動きあふれる想像上の動物「グルルチュ」をつくっていく。より自分の思いに合った形づくりのために実際にポーズをとったり、互いにポーズを見合ったりしながら体の曲がる部分に着目したり、様々な方向から全体のバランスを見たりしてつくることになる。補強のための芯材の使用や安定したポーズ、より楽しい動きにするためのデフォルメも必要となってくるだろう。また、細かい表情を表す部分など付随させたいものを自分の表したいイメージに合わせてつくり、どべを使って丈夫な接合して、「どこから見ても楽しくダンスする“グルルチュ”」をつくりあげていく。

子どもは、学習において自分の考えを広め、多くの考えを求めていく中で、学びが広がり高まっていくことを少しずつ実感してきているように感じている。しかし、それぞれが自分ならではの思いや表現をもつこと、それを全体に広め、比べたり、取り入れたりしながら自らの思いや表現をより高めていこうとするところまでは至っていない。この製作を通し、“自分ならでは”の「グルルチュ」やその動作、表情のイメージをもつこと（自分なりの造形に対する価値観）、それを広め、比べ、取り入れることで、自分や仲間の学びが高まっていくことを実感できるようにしていきたいと考えている。

本題材では、まず題材名をもとに自分の思いや発想をもつことを大切にする。そして、それぞれの思いを出し合う中で、様々な思いや発想と出会えるようにしていく。そして、ある程度製作の進んだ段階で、自分の作品を見直したり、友達の作品を見合ったりする場を設ける。その際、それぞれの表したい「動き」や「表情」を観点に「どこから見ても楽しくダンスする“グルルチュ”」であるか、部分や全体のバランスはどうかを吟味し、それぞれの“自分らしさ”を比べ、よりよい表現のために友達の表現のよさを取り入れることができるようにしていきたい。題材全体を通し、多くの思いや発想、表現と出会い、それらを認め合う過程で、最初の自分と変わった（思いや発想が広がった、表現が高まった）自分に気づくようにしていきたいと考えている。

(4) 集団のよさが息づく授業へのアプローチ

①　「学びのシェア」とのかかわりから

まず、題材名から「ダンス」「グルルチュ」のイメージを大きく膨らませていきたい。そのために「ダンス」＝動作・表情、「グルルチュ」＝想像上の動物に分け、それぞれが思ったこと、想像したことを話し合う場を設定する。その時に楽しくダンスする“グルルチュ”が感じていることも合わせて話し合うことで、グルルチュと自分とを重ね合わせ、表現への思いを高めていきたい。最初に思い感じたことと表現しようとしたことをメモし、話し合った後とを比べ、話し合いによって発想や表現への思いが「よりよく」に向けて変容したことに気づくようにしていく。また、この学習でみんなで大切にしたいことである「楽しい動き・表情」の要素を「曲がる部分」「全体のバランス」「目・口・耳などの部分の表情」へ具体化して、それぞれのめあてをもち、見通しをもって製作できるようにする。

そして、製作過程では、それぞれの表現を認め、より“自分らしい”表現へ向けて進展できるようそれぞれの表現を認めていきたい。相互鑑賞の場を設け、互いの表現やつくり方のよさを見つけ、それを認め広めていく中で、その後の自分の表現に生かしていけるようにする。また、「うまく立たない」「～な感じにしたいのだけれど、うまくいかない」などそれぞれの問題点を全体の課題として捉え、みんなで解決のための方策を出し合ったりする場を設けていく。

製作を通し、“感じ、考え、表現したこと”をふりかえりカードにつづったり、自分の作品の初めと終わりを見比べたりする自己評価活動を取り入れる。自分や友達の取り組み方、大切にし

たいこと、変容した要因を視点として自己評価活動ができるように促していきたい。「○○さんにポーズをとってもらったから楽しい動きをつくることができた」「◇◇さんのグルルチュの腕の曲がりや指の先まで楽しそうで、自分に取り入れたらまえよりもとても楽しそうになった」など友達とのかかわりの中で、自分の表したい動作や表情へと変容していったことを全体の場で出し合うことで、集団で学ぶよさを味わえるようにしていきたい。

② 規範について

本題材における大切にしたいことは、「造形に働きかけようとすること」「価値観や表現の多様性を楽しむこと」である。具体的な姿としては、自分ならではの“楽しくダンスするグルルチュのイメージを具現化しようとしている姿”であり、“友達の作品からよさや美しさを感じ楽しむ、自分の表現に生かす姿”となるだろう。

そこで、「楽しい動き・表情」の要素を自分の表したいイメージに合わせてめあてをもてたこと、そのめあてに向けて試行錯誤しながら取り組む姿を評価していきたい。「○○さんは腕の曲がりに気をつけてつくろうとしているから、楽しい動きになりそうだ」「◇◇さんは、何度もやり直しをしているからこそ、一番ぴったりの動きをつくることができそうだ」とよりよいものをめざして取り組む姿を全体に向けて評価していく。また、相互鑑賞の中で、表し方だけでなく、その取り組み方にかかわる発言を大切にして、“イメージを具現化しようとしている姿”のよさを全体に広めていきたいと考ている。

また、相互鑑賞で、あるいは、製作の途中で、友達の表し方にかかわる発言や表現を大切にして、全体の場に広げていきたい。つくりながら、友達の作品を見に行ったり、どうしたらそうなるかを尋ねたりすることも認め、いろいろな考え方や表し方を楽しむことができるようにする。そして、自らの表現に友達の作品のよさや美しさを取り入れて、自分のイメージする“グルルチュ”をつくろうとする姿も認め、全体の場に広げていきたい。併せて、「△△さんのどっしりとした脚の形が、□□さんの表現に取り入れられて、□□さんの動きがとっても“楽しい動き”に変わったね」など、友達の表現を取り入れるだけでなく、自分が友達の表現を支えたことを広げ、評価していきたいと考えている。

これらの大切にしたいことは、「めあてに向かって取り組む」「相手のよさを認めること・仲間の存在の大切さに気づくこと」という教室の規範へとつながっていくと考える。そして、それは「自分の存在の大切さに気づくこと」という規範へさらにつながっていくだろう。これらの集団で学び、見つけてきた規範を板書などに位置づけ、大切にしていかなければならないという心情を高めていきたい。

③ 評価について

「集団で学ぶよさ」が一人一人の学びをどのように支えたかは、本題材では、子どもの発言、ふりかえりカードの記述、表現を併せて見取ることになる。

具体的には、

・「最初は～だったけれど“○○さんのおかげで”“◇◇さんのアイデアを取り入れて”～になった」など友達との交流の中で、変容しようとする自分や変容した自分を認識している発言や記述から。

・子どもの取り組みと作品の変容から。

の２点となるだろう。

そのために、“友達とのかかわりのよさ”に触れる子どもの発言を聴き取ることを大切にしていきたい。また、ふりかえりカードには、相互鑑賞に関わって“楽しさに感動”“新しい動き・表情でビックリ”“ぜひ取り入れたい”“おかげで新アイデア”の４つの視点を設定し、友達の作品を見ることで変容しようとする、または変容した姿を見取っていく。また、製作の過程の作品を映像として記録していく。そして、題材の終わりの場面で、“この学習を終えて、変わったところはどこか”“それはどうしてか”を問う。これらの発言や記述、記録を用い「集団で学ぶよさ」が一人一人の学びをどう支えたかを検証していきたいと考えている。

(5) 本題材における授業の実際と考察

子どもが、積極的に題材にかかわり、集団で学ぶよさを生かしながら学びを高めることができたのかを実際の授業の流れと学びのシェアとのかかわり、評価ポイントを観点として、毎時間の子ども一人一人の思いや表現の過程を残した学習カード、日記、教師が残した一人一人の子どもの学習の内容や様相などの記録をもとに考察していく。考察を進めるにあたって、学習計画を以下の３つに分けて述べていきたい。

①学習内容を把握し、題材へのかかわりを広げる活動（教科理論❶❸の場）

②“自分ならでは”のイメージに互いのよさを生かして表現する活動（教科理論❷❸の場）

③自らの学びをふり返る活動（教科理論❹の場）

学習計画（総時数５時限）

主な活動と内容	主に意識する規範	評価のポイント
1　学習内容を把握する ○題材名から発想した自分のイメージを話し合う ・“ダンス！グルルチュ！ダンス！”なんだか楽しそうだ ・“ダンス”って何かが踊るんだな 楽しそうだ！　サンバかな　リズミカルに　おもしろい　笑顔 いろいろなイメージが浮かんでくるね　○○さんのイメージがおもしろいな ・“グルルチュ”って何だ？ 想像上の動物なんだね　でも、２本の脚でしっかりと立つんだね わたしはどんな動物にしようかな 体はシマウマで脚は像、顔はキリンだとおもしろいかも ワニの口ってのもおもしろいよ みんなそれぞれのアイデアがあっておもしろいね ・“ダンス！グルルチュ！ダンス！”って想像上の動物が楽しくダンスするんだ それを粘土で表すんだね　うれしい楽しいそんな気持ちだと思うよ	(1)	題材名から　自分なりの“ダンス”“グルルチュ”のイメージをもつことができている
○大切にしたいことを話し合う ・楽しいを表すには、「動きと表情」が大切だ　「どこから見ても」も大事だぞ ・グルルチュは、自分だけの動物にしないといけないな ・２本の脚で立つんだから、安定した形にしないといけない ・動きを表すには曲がる部分を大切にしないとだめなんだな ・“ひねり出し”という技でつくるんだ “楽しく踊るグルルチュ”を動きと表情を大切にして表そう		「つくることを想起し「動き」「表情」の工夫をすること「どこから見ても　に気をつけてつくる意識をもつことができている
2　製作する ・関節の動きに気をつけて“楽しい”を表していこう！ ・わたしだけの“グルルチュ”をつくっていこう！ ○粘土の固まりからひねり出して　大まかな形をつくる ・どれぐらいの量でひねり出せばいいのかな　なかなか立たないぞ ○○さんのように大きくひねり出していけばいんだな ・なんだか不安定だ　どうしたらいいだろう “つけたしタワー”の時のように芯を入れればいいかもしれない ・腕の長さは？　脚の長さは？　太さはどうかな？ ・だんだん形になってきたぞ	(1)(2)	基本の形から適切な量でひねり出し　関節での曲がりに着目して体の部分や動作を表している 様々な角度から形を確かめながら動作の特徴を表している
▲○相互鑑賞し　互いのよさを見つけて自分の製作に生かす ・◇◇さんのは体のひねりがあって“楽しい”感じが表れているよ わたしの作品にはひねりがないな　取り入れていこう ・△△さんの作品は関節でしっかり曲がっている　本当に踊っているみたいだ わたしの作品の関節を見てみよう　今日のめあてを見直そう ・わたしはしっぽでも楽しいを表現したよ　みなさんどうですか？ なるほど“ぜひ取り入れたい”だ　□□さんのおかげだ　ありがとう ・みんなのを見てみたけれど自分のグルルチュは自分だけのものだ！ ▽▽さんのグルルチュの“おかげで新アイデア”だ！　サングラスをかけよう ・友達と作品を見合うことでよりよくなっていきそうだ ○課題を見直し　製作する ・関節に気をつけてつくろう　だんだんと“楽しい”動きになってきたぞ ・指の先まで気をつけてつくろう ・顔いっぱいに“楽しい”が表れてきたぞ　口を大きく開けるといいんだな ▼・だんだん自分のイメージした“ダンス！グルルチュ！ダンス！”になってきた		部分と部分を丈夫に接合できている
3　活動をふり返り　まとめをする ・大切にしたいことを大事にして取り組めたよ　だから“とっても楽しくおどる”になった　やったね ・友達と一緒につくったからこそ　自分だけのグルルチュになったよ ・はじめはなかなか動きを表すことができなかったけど　何度も試しているといい動きをつくることができるようになってきた　何度もって大切だな ・前と比べてみることで変わってきた自分を見つけることができたよ ・わたしのおかげで○○さんはよりよくなったって言っていた　うれしいな ・みんなの作品を集めて　ダンスパーティができそうだ　どこに飾ろうかな	(1)(2)	楽しい動きや表情　自分ならではのグルルチュを視点に互いのよさや美しさを味わっている

友達の考え方・表し方から　自分の考え方・表し方を広げている

教室の規範　(1)　めあてに向かって取り組む
　　(2)　仲間のよさを認める

① 学習内容を把握し題材へのかかわりを広げる活動における考察

－単元の流れ－
1　学習内容を把握する
○題材名から発想した
　　自分のイメージを話し合う
【ダンス！グルルチュ！ダンス！】
・“ダンス”って言葉からは
「フラミンゴ」
「バレエ」
「あわおどり」ってイメージがわくな
・“ダンス”って
「気持ちいい」
「おもしろい」
「楽しい」ってことなんだな
・“グルルチュ”って何だ？
「想像上の動物」なんだ！
「２本足で立ち２本の手」があるんだな
・どんなのにしようか…
・ドラゴンのようにしたいな
・恐竜のようにしたいよ
・粘土でグルルチュをつくるんだ

○大切にしたいことを話し合う（※）
・３年生の「つけたしタワー」では、
「どこから見てもさみしくない」を
大切にしてきた
でもあまりうまくいかなかったな
だから今度も
「どこから見てもさみしくない」だ
・その時はぼろぼろに壊れてしまった
壊れない頑丈なものにしたいな
・バランスのよいに気をつけたいな
・“ダンス！グルルチュ！ダンス！”に合わせて考えると
「どこから見ても楽しい
　　顔・表情・動き」、
「部分と全体のバランス」だ
・「頑丈に」のためにひねり出しや
　　どべを使うといいんだな

写真１　自分の体で曲がる部分を確かめる

・本当に踊っているみたいするには
「関節の曲がり」にも気をつけない
といけないな
・みんなでそろって頑張ることは

自分だけのグルルチュをつくろう
バランスに気をつけて楽しみながら
（自分もグルルチュも）つくろう

だ！

❶既存の価値観をもとに何をすべきか見つける場
❸自分の価値観と他の様々な価値観を関連づけて
　　自分なりの新しい価値観を広げる場

・題材名から、自分なりの“ダンス”“グルルチュ”のイメージをもつことができている
・つくることを想起し、「動き」「表情」の工夫をすること、「どこから見ても」に気をつけてつくる意識を持つことができている

本題材では、「ダンス」「グルルチュ」という言葉から楽しくダンスする想像上の動物を考えることができることを目標の１つに掲げている。自分だけでは広がりをもったイメージをつくり上げていくことは難しい。より広がりのあるイメージづくりのためにより多くの様々なイメージと出会い、それらを再構成して自分だけのダンスするグルルチュをより広くイメージしていくことが大切になる。

そこで、まず、“ダンス！グルルチュ！ダンス！”と何も言わずに板書をした。子どもは、口々に「『グルルチュ』って何？」と即座に反応をしていた。ここで、「ダンス」と「グルルチュ」について自分の考えているイメージについて話し合う場を設け、イメージの交流を図った。

「ダンス」という言葉からは「おどる」「フラミンゴ」「はらおどり」「バレエ」「あわおどり」「音楽に合わせて」というイメージが出された。そうしたイメージを“どんな感じか”と問い返すことで、“ダンス”＝「気持ちいい」「おもしろい」「楽しい」という共通したイメージへと集約することができた。

「グルルチュ」については、教師から「想像上の動物であること」「２本足で立ち、２本の手があること」を伝え、それぞれのグルルチュのイメージを話し合った。そこでは「自分だけの」「人間のように立つ」「ドラゴンのように」「恐竜のように」などの発言を得ることができた。

その後、この学習を通して大切にしたいことについて話し合った。この話し合いの場では、３年生での粘土を用いて製作した「つけたしタワー」の経験やこれまでの立体造形での経験から「どこから見てもさみしくない」「頑丈に」「バランス（＝安定した形）」の３点が出てきた。それらを本題材と関連づけるよう促した。そして、ポーズをとった友達をより楽しいポーズに変えていくことを通して「どこから見てもさみしくない」は「どこから見ても楽しい顔・表情・動き」であること、「バランス（＝安定した形）」は「手・足・首・顔…の部分と全体のバランス」であることをみんなで確認することができた。また、「丈夫に」に関しては、「ひねり出し」の技法、「どべ」について教師側から実際に粘土で形づくりながら提示し「頑丈につくる」ことに補足した。ひねり出しながら形づくっていく過程では、子ども達から歓声が上がり、「これだと丈夫につくることができそうだ」という思いを引き出すことができた。また、楽しく踊る動きを表すために教師がつくった粘土の形と自分の体を比べる場面を設定した（写真１）。このことから自分の体を様々に動かし、曲がる部分を確かめる姿が見られ、曲がる部分を大切にして動きをつくっていく意識を高めることができたと考えている。

こうした活動を通して、みんなで取り組んでいくめあてとして「自分だけのグルルチュをつくろう・バランスに気をつけて楽しみながら（自分もグルルチュも）つくろう」を設定することができた。その後、各自がめあてを立てた。

学習カードに記述した各自の今日のめあては、表2の通りである。「ダンス」にかかわるめあて（動きづくりに関して：表中●で示す）と「グルルチュ」にかかわるめあて（イメージの具現に関して：表中◆で示す）”に大別して考えてみたい。その様相は、表3のようになる。

全体での話し合いの後に一人一人が設定した今日のめあては、動きづくりに関してとイメージづくりに関してがおおよそ半分ずつとなっている。このことは、話し合いを通して「グルルチュ」をイメージしてつくることを中心に考えた子どもと「ダンス」する姿を中心に考えた子どもが半数ずついると捉えることができる。

（番号は紀要上の番号　以下同じ）

No.	〈自分の今日のめあて〉 ● “ダンス”にかかわるもの：動きづくりに関して ◆ “グルルチュ”にかかわるもの：イメージの具現に関して	No.	
1	〈曲がる部分などを上手にひねり出す〉●	17	〈自分のオリジナルをつくろう〉◆
2	〈立つように〉●	18	〈（つくり方など）自分のオリジナルに〉◆
3	〈想像力の限界にいどむ〉◆	19	〈どこから見てもさみしくない〉●
4	〈頚にこだわって〉◆	20	〈バランスよく〉●
5	〈できれば体を楽しく見せる〉●	21	〈かわいいのを〉◆
6	〈見たこともない生物〉◆	22	〈自分にあった形をつくろう〉◆
7	〈自分のオリジナルを作ろう〉◆	23	〈形と様子を観察して〉●
8	〈うでの形にこだわって〉●	24	〈オリジナル・バランスグルルチュ〉●◆
9	〈基本の形をしっかりつくる〉●	25	〈基本の形をつくる〉●
10	欠席	26	〈犬のよう　楽しそうな〉◆
11	記述なし	27	〈オリジナルに〉◆
12	〈がんじょうに〉●	28	〈すぐにくずれないようがんじょうに〉●
13	〈楽しそうな顔に　どこから見てもさみしくない〉●	29	〈がんじょうに〉●
14	記述なし	30	〈楽しくする　バランスに気をつける〉●
15	記述なし	31	記述なし
16	〈自分のオリジナルに〉◆		

表2　製作1回目〈各自のめあて〉（学習カードより）

中心となるめあて	人　数	
動きづくりに関して	●●●●● ●●●●● ●●●●●	15人
イメージの具現に関して	◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆ ◆◆	12人

表3　製作1回目〈各自のめあて〉の様相（表2より）

全体での話し合いで題材名から「ダンス」「グルルチュ」のイメージを広げていくことができると考えていた。しかし、子どもにとってイメージ化は難しかったようである。子どもの発言には、広がりがなく、言葉から言葉を発想していくことにとどまっている。また、発言する児童も限られていた。表中◆で示したイメージの具現に関してめあてを設定した12名の記述からも具体的な「グルルチュ」を意識しためあては見られない。詳しくは②で述べるが、実際につくりながらイメージを広げていく子どもが多かったことからも、話し合いによる活動だけでは、製作へ向けた具体的なイメージはつかみにくいということであろう。

一方、つくることを想起し、大切にしたいことを話し合う場面では（前頁：単元の流れ※）、「動き」「表情」「どこから見ても」に気をつけてつくっていこうという思いが子どもの発言に表れている。全体で話し合い、これまで学習してきたことを本題材とつなげて考える場を設けたことで、共通に大切にしたいことを考え、みんなで取り組んでいくめあてを決定することができたといえよう。また、これまでの経験を想起したことで「丈夫に」という思いを高め、ひねり出しによる製作への思いを高めることができたといえる。上記の表2からも一人一人の中心とする

ところは違うが、みんなで取り組むめあてを意識して各自がめあてを設定することができたと評価できよう。

② “自分ならでは”のイメージに互いのよさを生かして表現する活動における考察

2　製作する-1
○粘土の固まりからひねり出して
大まかな形をつくる
・なかなかうまく手足ができないぞ
・遠くの方から粘土を取ってこよう
・形はできた　でもなかなか立たない
・足を太くしてみよう
・体を前に倒してみよう
・だんだん
楽しいグルルチュになってきたぞ

写真２　つくりながらイメージを広げる

○相互鑑賞し、互いのよさを見つける
・21さんのが横からでも前からでも
楽しそうだな
「楽しさに感動！」だ
・26さんのは体が傾いて
ポーズをとっている
「新しい動き・表情でビックリ！」
「ぜひ取り入れたい！」
「おかげで新アイデア！」だ

○今日のふり返りをする
・自分のめあてに向けてがんばれたよ
・顔にこだわってというめあてで
心から笑っているようにできた
・基本の形をしっかりつくるというめあてで、いい太さでひねり出すことができた
・友達とやったからこそ
オリジナルになるね
・「こうしたら」って
言い合いっこができたよ

○あとかたづけをする

❷自分の表したいことに合わせて発想し
構想を練り、自分らしい表現をする場
❸自分の価値観と他の様々な価値観を関連づけて
自分なりに新しい価値観を広げる場

・基本の形から適切な量でひねり出し、関節での曲がりに着目して体の部分や動作を表している
・様々な角度から形を確かめながら動作の特徴を表している
・部分と部分を丈夫に接合できている

各自が設定しためあてをもとに製作に入った。まず、基本となる卵形の粘土の固まりをつくり、手、足、頭…になる部分をひねり出して形づくりに取り組んだ。ひねり出していく粘土の量がなかなかつかめず、苦労している子どもが多かったが、何度も試しているうちにだんだんと形ができあがってきた。話し合いの活動では、具体的なイメージをもつことができなかった子どももつくりながらだんだんとイメージを広げていたようである（写真２）。子どもの日記と前述のめあてや製作―1を終えての「めあてに向けてがんばったことは何ですか」という学習カードの問いに答えた記述を比べてみると子どものイメージがつくりながら広がっていることが分かる（表４）。

それぞれが自分のイメージをもとにだいたいの形づくりができた時点で、相互鑑賞の場を設けた。様々な表現に触れ、互いのよさや表し方の工夫について認め合い、自分の表現に生かすことができるようにと考えたからである。視点として「楽しさに感動！」「新しい動き・表現でビックリ！」「ぜひ取り入れたい！」「おかげで新アイデア！」の４つを設けた。相互鑑賞では、ほとんどの子が友達の作品を食い入るように見て、そのよさを見つけていた（次頁表５）。短い時間の中であったが、30人で87点のよさや表し方の工夫について見つけている。特に４つの視点の中で「新しい動き・表情でビックリ！」について31点の記述があったことは、相互鑑賞の場を設定し互いの作品を見合うことで、自分だけでは考えつかなかった新しい動きや表情を見つけ、認めることができたことを示しているといえよう。

No.	授業でのめあて	日記の記述（イメージの広がりに関わる記述を抜粋）
3	〈想像力の限界にいどむ〉	グルルチュはぼくはかめと鳥とヘビとつのと長いしっぽがついていてとても強そうにしたので楽しそうにするのは難しそうです
7	〈自分のオリジナルを作ろう〉	自分の頭の中にいるグルルチュをそうぞうしてつくりました。おもしろいふうに、クマ＆ドラゴン＆ペンギンとちょっとおもしろふうにイメージしました
22	〈自分にあった形をつくろう〉	わたしはブタをつくりたいと思いました（わけ：自分と似ているから）だから自分がブタになっておどった動物をつくりました
26	〈犬のような　楽しそうな〉	「ような」というのにきをつけて形をつくりました　わたしは犬が好きなので犬のような形だけど羽がついていてそうぞうの中の動物をつくりたいです

No.	授業でのめあて	学習カード「めあてに向けてがんばったことはなんですか」
21	〈かわいいのを〉	好きなネコでグルルチュを
24	〈オリジナル・バランスグルルチュ〉	うしろからみたらゾウで前から見たらカブトムシのところ

表4　つくりながら広がるイメージ　授業でのめあてと日記・学習カードの記述から

1	あ：（29）手の動きがおもしろい た・あ：（13）顔がたこみたいでおもしろい
2	？：（3）つばさがかっこういい あ：（24）口とかっこうがいい た：（11）笑顔が楽しそう
3	あ：（11）目が飛び出していておもしろいポーズ た：（17）べったりすわっていておもしろい あ：（6）上に口がついていた
4	ぜ：（3）はねが平べったく あ：（16）しっぽが長くて
5	あ：（24）指がある ぜ：（3）いろんな動きがある
6	あ：（13）口の形
7	ぜ：（3）ドラゴンの羽 あ：（13）楽しそうに笑っている あ：（11）手を曲げている お：（8）しっぽぐにゃぐにゃ
8	ぜ：（13）口、手の曲がりを取り入れたい あ：（14）後ろがゾウみたい　表情もグー
9	ぜ：（3）飛び立ちそう あ：（13）口がタコみたいな表情手のおもしろい動き た：（11）猿みたいな動きが楽しそう
10	欠席
11	た：（13）楽しさばつぐん ぜ：（2）立ち方がいい
12	あ：（24）指があった あ：（14）羽がおもしろかった ぜ：（13）口がタコみたい
13	た：（11）口が楽しそう 手の動きも11さんにていていい あ：（8）しっぽの動きがはく力がよく出ている
14	ぜ：（13）記述なし あ：（？）すがた お：（15）しっぽ
15	た：（13）記述なし あ：（11）目ん玉がとび出しているところ
16	あ：（24）ポンスターみたいにうらにゾウがある た：（13）笑顔がいい
17	あ：（19）いろいろな形のしっぽ た：（23）丸いものの粘土をつくって
18	た：（11）楽しそうな表情 た：（29）笑っていたので楽しいが伝わる た：（26）おもしろい　楽しそう ？：（3）とてもバランスがよかった
19	あ：（24）まるい羽　ハチみたいな角 あ：（13）タコのような口で
20	ぜ：（21）前くつなのにバランスが○　自然な感じで○ あ：（3）こまかくてとれなくておもしろかった
21	？：（18）楽しそう た：（19）おどってるみたい　かわいい ？：（3）細かくてすごい ？：（5）おどっている感じ
22	あ：（13）口の形がタコ ぜ：（26）羽がついていたところ あ：（3）ドラゴンのような様子 あ：（11）目がとてもおもしろい
23	あ・ぜ：（3）おそいかかってくるような表現 た：（13）口の形 ぜ：（19）かわいい
24	あ：（1）平べったくて ？：（11）目ん玉　サルポーズ ？：（3）しっぽがリアル ？：（30）楽しい表情が伝わってくる ？：（23）しっぽが立っていていい
25	ぜ：（19）しっぽが長くてまがってる
26	あ：（18）前の動き　三角耳 あ：（3）口の深さ　たれないしっぽ た：（11）本当のうでみたいに
27	？：（11）両手が頭の上でおもしろい ？：（21）羽がついてて ？：（29）伸びている手と伸びていない手があって ？：（24）ウサギのような耳 ？：（13）口がタコみたい
28	？：（3）楽しそうで生きているみたい ？：（21）横からでも前からでも楽しそう ？：（13）口がおもしろいアイデア
29	お：（24）後ろから見たらゾウという考えが た：（3）どこから見てもさみしくない！
30	あ：（24）後ろがゾウで ぜ：（21）恥ずかしそうで楽しそう あ：（3）はく力がある あ：（5）角があった
31	ぜ：（18）耳がついている た：（24）表はクワガタ　うらはゾウ あ・ぜ・お：（26）かたむいてポーズ

相互鑑賞の視点	人数（人）
た：（No.）楽しさに感動！	18
あ：（No.）新しい動き・表情でビックリ！	31
ぜ：（No.）ぜひ取り入れたい！	17
お：（No.）おかげで新アイデア！	6
？：（No.）項目の記述なし	15

表5　製作1回目を終えての『～さんのこんなところが「おーっ！」「すげーっ！」「すてき」だったよ』

この87点の記述のうちのほとんどが部分に関するものであった。それは、製作に入り間もないこともあり、全体像が表れていないことも要因として考えられるが、自分にはない特徴的な部分へ意識が集中するという子どもの見方や感じ方を示しているといえるだろう。

製作過程における作品の多くが、関節での曲がりを意識したものになっていた（写真3）。これもみんなで話し合い、大切にしたいことを共有したことが、記述されためあてとしては位置づけられてはいないが、実際の製作の場面で生きていたと考えることができる。

今日のふりかえりでの「友達と学習してよかったなぁと思うことは何ですか」の設問に、「友達とつくるからこそオリジナルなものになった」「みんなとやることでいろいろなアイデアができた」「26さんが『細いしっぽにしたい』といったので『あっ、そうできるんだ』と気づけた」などの記述があった。これは、集団で学ぶことで自分ならではのグルルチュのイメージが広がったり、学びが深まったりする自分に気づいている姿であるといえるだろう。

写真3　「関節の曲がりに気をつけてつくる」

2　製作する-2
○前時のふり返りをする
・自分だけのグルルチュをつくった
・バランスに気をつけてきた
・表情　頑丈　安定に気をつけてきた
・11さんの目玉が
飛び出ていたのがよかった
・3さんのいろいろな動物の組み合わせや
表情、動作がよかった
・24さんのは前にも後ろにも
顔があってよかった
◇粘土をまとめてしまったのは？
・つくるものの気が変わった
・いろんな動物が重なったものに
つくり直したかった
・粘土のしまい方がよくなくて
つくり直したかった

自分だけのグルルチュ
バランスに気をつけてつくろう

○各自のめあてを設定する
・めあてと照らし合わせて
今日のめあてをつくろう

写真4　今日のめあてをつくる

・耳の数を増やしながらバランスよく
・前後左右のバランスよく
・取れにくくする
・針金や割り箸を使えばいいよ
・どべを使えばいい
・粘土べらはどべ用の傷をつけたり
模様をつけたりできるな

○製作する
・いろいろな方向から見てみよう
・針金を入れたらいいよ

写真5　アドバイス・ろくろでの確かめ

・どこから見ても楽しい感じを確かめるために“ろくろ”を使ってみよう

○自分の取り組みについて話し合う
・手を前後左右に動かすと楽しくなった
・粘土べらで眉毛をつけたり、
手を長くしたりした
・しっぽをひょろひょろと動かしたら
かわいくなった
・口を彫ったら全体的に元気になった

粘土が乾かないように丁寧に梱包した袋から1週間ぶりにグルルチュを取り出して、最後の製作に取り組んだ。大切にしたいことを確認し新しいめあての設定へ向けた課題意識をもつことができるように、まず初めに前時のふりかえりを行った。その中で友達の表現を認める発言があった。そこで、「自分だけのグルルチュ」「バランスに気をつける」というみんなで決めた大切にしたい2点に関連づけて、友達の表現のよさを板書し、各自のめあての設定に視点を与えることができたと考える。製作－1でのめあてと製作－2でのめあてとを比べてみると、動きづくりとイメージの具現に関しての両方を記述した子どもが増えている（次頁表6）。また、前回、動きづくりにかかわるめあてを設定した子の多くが今回はイメージの具現にかかわるめあてを、逆に前回はイメージの具現にかかわるめあてを設定した子の多くが、今回は動きづくりにかかわるめあてを設定した。このことは、全体での話し合いや相互鑑賞、自分の表現を見直すことを通して、大切にしたいことが一人一人に意識化されたことを示しているといえよう。つまり、様々な価値観との出会いが、新しい造形とのかかわりをつくったといえる。

めあてを設定する場面で、丈夫なつくり方についても確認することができた。一人の「取れにくくしたい」という発言から「どうしたらよいのだろうか」という全体への課題提起となり、全体で話し合うことで、みんなでその課題解決への確認をすることができた（写真4）。

製作の場面では、いろいろな方向から見て自分の表現を確かめようとする姿が多く見られるようになった。ろくろに載せて回して見たり、高い所から見下ろしたり、低い所から見上げたりして「どこから見ても楽しいグルルチュ」へ向けて、意欲的に取り組んでいた。また、「針金を入れたらいい」とアドバイスしたり「ここはこうして」と手を貸したりする姿も見られた（写真5）。

ある程度製作が進展した時に自分の取り組みをふり返る時間を設けた。「手を前後左右に動かしたら、楽しくなった」「粘土べらを使って羽に模様をつけた」「手を長くした」「持ちものをもたせたらとても楽しい雰囲気になった」など自分の取り組みをふり返り、広めることで、自らの取り組みが認められ、意欲を高めると同時に、友達の表現のよさや表し方の工夫への意識づけをすることができたと考える。

その後、相互鑑賞の場を設けてよさや表し方の工夫を見つけ、各自のめあてを見直すよう促した。自分の取り組みや友達の取り組みをふり返ることで、新しい製作への指針となるものが生まれてくると考えたからである。子どもは興味深く友達の作品を見て回り、学習カードに記入していた（写真6）。めあての見直しについては、3名のみであった（表6中№7、22、25）。その後の表現の変化と合わせて考えてみると、この段階でも友達の表現から自分なりによさや表し方の工夫を捉え、自らの表現に生かしている様子が見える。マラカスやバナナなどをもたせたり、体を大きくひねらせたりとより楽しい動きになるようにそれぞれが、全体での交流を通して、新しい表現に向けた取り組みをしているのである。つまり、この場面においてめあての見直しは子どもの意識の中で行われているということになる。このことは子どもの日記の記述からも読みとれる（次頁表7）。製作の初めには、めあてを設定し、取り組みの指針をつくっていくことは重要である。しかし、一人一人に大切にしなければならないことが意識化されたこの段階へと進んでい

○相互鑑賞をもとに自分のめあてを見直し製作に生かす

写真６　相互鑑賞　めあてを見直すために

・13さんのはものを持たせてあって
　　とても楽しい感じがするな
「ぜひ取り入れたいだ！」
・大きな動作で楽しそうだ
　　体がひねってあるぞ
・表情がとても楽しいになってきたぞ

○ふり返りをする
・とっても楽しいグルルチュになった
・友達と一緒にやったからだな

けば、カードにめあてを記入し直すということは、つくるということだけに限定すれば、必要ないということであろう。

時間いっぱい粘土と向き合い、もっと楽しいグルルチュになるように製作する子ども達の姿が印象的であった。作品展示のために移動するときにも細心の注意を払い、そして、たくさん並んだグルルチュを見比べながら、それぞれの表現を楽しんでいた。

ここで、一連の製作過程を通して集団で学ぶ中での子どもの変容の様相を見ることにしたい。本来ならば、一人一人の子どもが集団の中でどう学びにかかわり、どう変容したかについて述べなければならない。しかし、ここでは、№13の子どもを取り上げ、その表現が集団の中でどう広がっていったかについて述べることにしたい。

13は、製作−2において集団の中で初めてグルルチュに持ちものをもたせた子である。前述したように自分の表現をふり返る場面で「持ち物をもたせたらとても楽しい雰囲気になった」と自分の表現のよさを全体に広げている。その後の相互鑑賞の中で13の作品を取り上げた子どもは、９名であった（表８）。最終的にグルルチュに持ちものをもたせた子どもは14名である。相互鑑賞で取り

No.	製作-１でのめあて 製作-２でのめあて→見直し後のめあて
1	〈曲がる部分などを上手にひねり出す〉●
	〈全体を前よりよりよくする〉●
2	〈立つように〉●
	〈笑顔をつくろう〉◆
3	〈想像力の限界にいどむ〉◆
	〈バランスにも気をつけて新グルルチュへ〉●◆
4	〈顔にこだわって〉◆
	〈もっと手と足を楽しそうにする〉●
5	〈できれば体を楽しく見せる〉●
	〈がんじょうに〉●
6	〈見たこともない生物〉◆
	〈自分だけのグルルチュをつくる〉◆
7	〈自分のオリジナルを作ろう〉◆
	〈どこから見ても楽しい〉● →〈持ち物をもたせてもっと楽しく〉◆
8	〈うでの形にこだわって〉●
	〈手にこだわりバランスに気をつける〉●
9	〈基本の形をしっかりつくる〉●
	〈耳の数・表情たおれないように足をしっかり〉●◆
10	欠席
	〈どこから見てもさみしくない人のを取り入れて〉◆
11	記述なし
	〈楽しそうでゆかいなふうに かっこうよくさみしくない〉●◆
12	〈がんじょうに〉●
	〈前後左右のバランスを固める〉●
13	〈楽しそうな顔に　どこから見てもさみしくない〉●
	〈がんじょうにとれにくいようにする〉●
14	記述なし
	〈手・耳・足をいいものにする〉●
15	記述なし
	〈がんじょうにつくる〉●
16	〈自分のオリジナルに〉◆
	〈どこから見ても楽しいグルルチュをつくる〉●
17	〈自分のオリジナルをつくろう〉◆
	欠席
18	〈（つくり方など）自分のオリジナルに〉◆
	〈どこから見てもバランスみんなを見てつくろう〉●
19	〈どこから見てもさみしくない〉●
	〈だれもしらないダンスにする〉●
20	〈バランスよく〉●
	〈自分だけのアイデアでもっと楽しくする〉●◆
21	〈かわいいのを〉◆
	〈自分だけのグルルチュをつくる〉◆
22	〈自分にあった形をつくろう〉◆
	〈どこからでも全体のバランスよくがんじょうに〉● →〈顔や表情を楽しそうに〉◆
23	〈形と様子を観察して〉●
	〈動物をプラスしてどんどんすてきに！〉◆
24	〈オリジナル・バランスグルルチュ〉●◆
	〈がんじょう　げんきにダンス〉●
25	〈基本の形をつくる〉●
	〈とれにくくする〉●→〈明るくする〉●◆
26	〈犬のよう　楽しそうな〉◆
	〈犬のような耳と表情〉◆
27	〈オリジナルに〉◆
	〈前後左右のバランスに〉●
28	〈すぐにくずれないようがんじょうに〉●
	欠席
29	〈がんじょうに〉●
	〈楽しみながらがんじょうで楽しそうにつくる〉●
30	〈楽しくする　バランスに気をつける〉●
	〈がんじょうにして楽しくする〉●
31	記述なし
	〈がんじょうに　たのしそうに〉●◆

●「ダンス」にかかわるもの：形づくりに関して
◆「グルルチュ」にかかわるもの：イメージの具現化に関して

表６　製作−1のめあてと製作−２でのめあての変容

No.	製作－2のめあて	日記の記述から
2	笑顔をつくろう	（略）次に動作をななめにしてみました。踊っているようになったと思いました。（略）1つはえんぴつでたくさんあなぼこをあけてみました。（略）2つはえんぴつでぐるぐるの形にしました。（略）
4	もっと手と足を楽しそうにする	しっぽを長くを取り入れて、しっぽをつくりました。（略）長くしただけじゃなくて、まるめてつくりました。（略）足の後ろにもさみしかったのでもようをつけました。（略）
12	前後左右のバランスを固める	（略）ぼくの「グルルチュ」はかたからヘビが出ている「グルルチュ」です。（略）
29	楽しみながらがんじょうで楽しそうにつくる	（略）どちらかというと前よりも一っと楽しいグルルチュがつくれました。持ち物をもたせたり、頭にも何かつけるとより楽しくなります（わたしはマラカスをもたせました）。

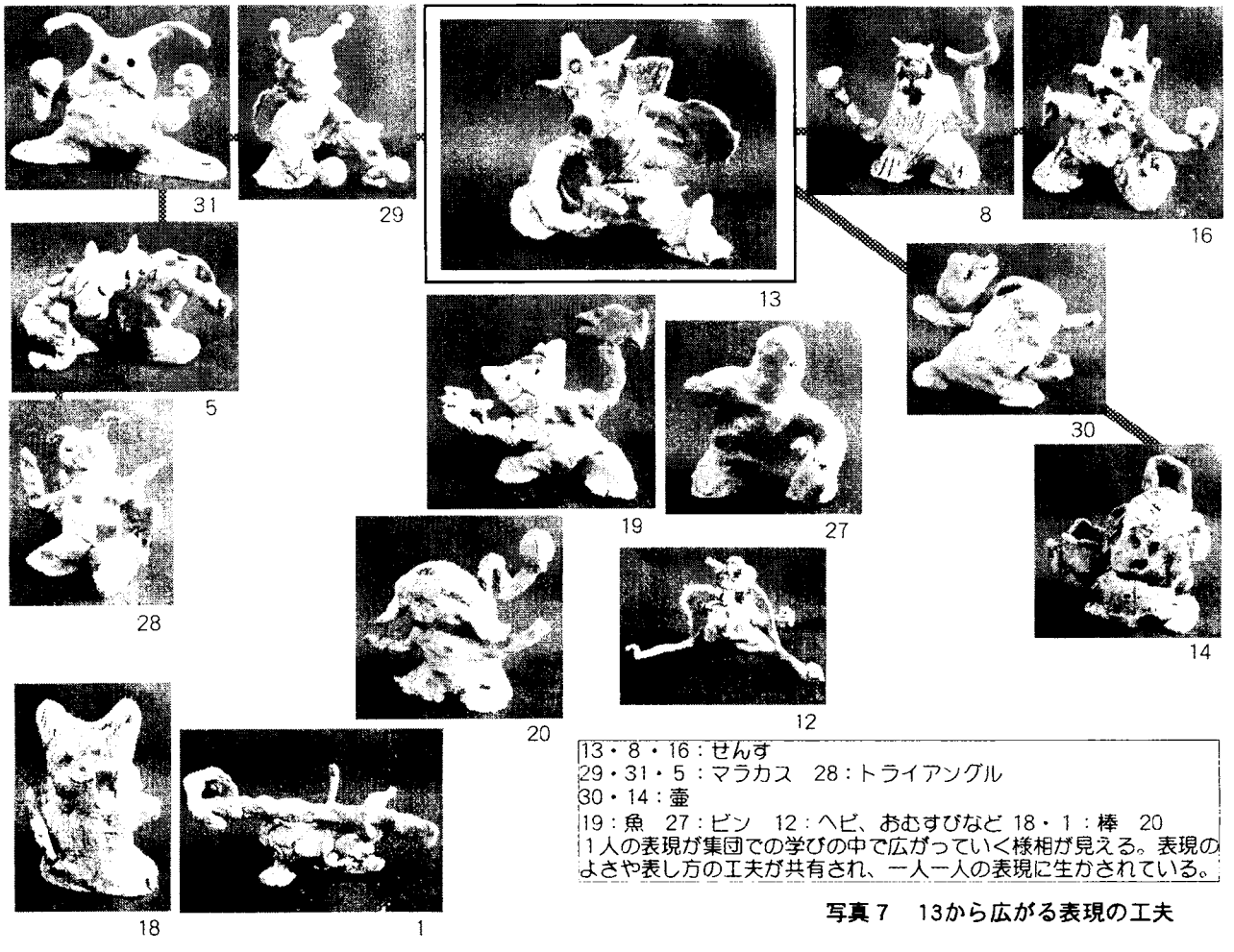
表7　各自のめあてと子どもの意識（学習カード・日記より）

No	相互鑑賞項目	具体的な記述
8	楽しさに感動！ 新しい動き・表現でビックリ！	センスを持っていて手の動きも交互で楽しそう
29	楽しさに感動！	持ちものを持っていて楽しさ倍！
30	おかげで新アイデア！	手にセンスを持っていてすごい!!
2	新しい動き・表情でビックリ！	なかなかいいセンス
3	楽しさに感動！ 新しい動き・表現でビックリ！	とってもいいせんす（センス）
9	新しい動き・表情でビックリ！	タコみたいで持ちものを持ち踊っているところ
11	おかげで新アイデア！	もちものセンス
23	ぜひ取り入れたい！	なかなかいいセンス！センスを持っていていいかも!?
27	楽しさに感動！	せんすを持っていて楽しさに感動！

表8　相互評価における13番に対する記述

上げ、作品に持ちものをもたせたのは3名（表8中の網掛け）であり、あとの11名は、相互鑑賞の中で13の表現を取り上げなかった子どもである。相互鑑賞の中では特に取り上げる表現と捉えていなかったものが、その後の製作において交流され、11名に広がったと考えられる。さらに、後述の表9の1、5、8、19、20、29の子どもは、自分の表現をふり返ったとき、持ちものをもたせているところをよさとして記述している。また、表10「変わった自分」についても13はもちろん、2の子も「持ちものをもたせるなどの工夫をすることができた」と自らの変容を語っている。

楽しいイメージにあった持ちものをもたせることは、「楽しくダンスするグルルチュ」へ向けた表し方の工夫の一要素である。「持ちものをもたせたら～」という発言を板書に位置づけ、子どもとともに相互鑑賞しながらよさを話すという支援を行った。しかし、それ以上に子どもが集団の中で表現のよさや表し方の工夫を受け渡ししながら、それぞれの表現を高めていっているといえよう。前述のめあての見直しと絡めて考えた時、製作を進めていく中で、集団で学ぶよさを生かして学んでいるといえるであろう（写真7）。



13・8・16：せんす
29・31・5：マラカス　28：トライアングル
30・14：壺
19：魚　27：ビン　12：ヘビ、おむすびなど 18・1：棒　20
1人の表現が集団での学びの中で広がっていく様相が見える。表現のよさや表し方の工夫が共有され、一人一人の表現に生かされている。

写真7　13から広がる表現の工夫

③　自らの学びをふり返る活動における考察

❹自らをふり返り、自分の価値観の広がりや創造性の高まりを認識する場

・楽しい動きや表情、自分ならではのグルルチュを視点に互いのよさや美しさを味わっている

題材を通し、学習カードを用いて毎時間ふりかえりを行ってきた。これまで書きつづってきた学習カードや作品などを見直して、価値観の広がりや創造性の高まりを確認する場を設定した。「めあてに照らし合わせて自分の作品を見てみよう！どこが◎？どこが△？」を学習をふり返りながら書いている（表９）。

1	◎目が大きい　手を長くして踊っているようにした 持ちものを持たせている △ちょっと不安定なところ	17	◎羽を４まい
2	◎表情は楽しく動きがおどっているようにできた 羽をつけた ステージをはさみで切るのではなくちぎってみた	18	◎みんなとちがうグルルチュができた めあても生かしてできた
3	◎楽しい動き、表情　自分だけのグルルチュ	19	◎からだがななめになっている 魚を２つ持っている △ちょんとさわっても動いてしまう
4	◎目がオリジナル △指が異常にまがったところ	20	◎顔の形がかわいい　しっぽでボールを回している 他の人のを見て“オリジナル”の参考にできた △関節がしっかり曲がっていない 手の動きがあまりオリジナルではない
5	◎マラカスを持たせたところ 口がにっこり笑っているところ いろいろなところに顔がある　指までしっかりつくった △顔があんまり楽しんでいない	21	◎耳などが傾いていていい　目などがかわいい 羽のもよう △足がういてしまう 羽がちょっと変
6	◎手を振っているところ　にっこり笑っているところ 手にものを持てる 上に口、触手、触角、卵を産む場所がある	22	◎楽しい動き　自分だけのグルルチュができた △表情 粘土のつけ方
7	△どこから見ても～がうまくいかなかった 今度はうまくいけるようにしたい	23	◎どこから見ても △ポロポロあとから落ちてしまうところ
8	◎体がななめ　バナナを持っている　あとをつけた △うしろがさみしい	24	◎口　羽　体
9	◎手を振るような動きで楽しそうになった 耳が８個もあってオリジナルになった △表情はうまくいかなかった	25	◎リボンをつけた
10	◎表情が楽しそう	26	◎風を感じるような耳になった 体がななめに傾いている △どべがよくない 羽の形をもっとしっかり　しっぽをつるつるに
11	◎口のあけ方、手の動き	27	◎どべがよくできている △足の裏の大きさが違う　ぐらぐらする
12	△少しとれてしまった	28	◎手の動きが楽しそう △横から見るとあまり楽しくない
13	△部分がバラバラにくずれている	29	◎片足をあげている　楽器を持っている △針金が見えている　手が下についている
14	◎模様 △少しバランス	30	◎ななめで立っている △つぼのところがとれてしまった
15	◎（体が）ななめ（に傾いているところ） きばが上にも下にもついているところ もよう　はね　しっぽの迫力	31	◎とれないようにつけることができた △穴があいている
16	◎手の部分が楽しそう 自分だけの表し方ができた △表情の目の部分が少し笑っていない		

表９　めあてに照らし合わせて自分の作品を見てみよう！　どこが◎？どこが△？

表９を見ると、よいところはどこかについて自分なりにふり返り、記述している。自分の作品をしっかりと見つめ、細かい点まで自分の高まりを見つけようとする姿が見て取れる。これまで述べてきたように、めあてやめあてを達成するために大切にしなければならないことを意識し、それぞれの価値観や創造性を駆使してつくりあげてきたからこそ、自身の学びが進展してきたことを認識することができたと考えられる。手足や口、しっぽなど部分にこだわった記述が多いことは、部分と全体のバランスをつなぐ教師の手立てが不足していたからにほかならない。

また、こうした自己評価活動には、子どもの自己評価力が大きくかかわってくる。例えば、13番の子の作品は、多くの友達に認められその表し方の工夫が集団へと広がっていったにもかかわらず、「△部分がバラバラにくずれている」というよくない点のみを挙げている。逆によい点の

みをいくつも挙げている子もいる。もちろん、自己の取り組みを肯定的、あるいは否定的にに見つめることも大切である。しかし、客観的に自分の学びの高まりを見つめ、認め、改善していくという自己評価力を育てていく自己評価活動のあり方を考えていかなければならない。例えば、自己評価の観点を教師が与えたり、時にはみんなで話し合って決めたりしながら、ある規準をもって自己評価活動を行うことを通して自己評価力を高めていくこともできるであろう。

1	自分の手だけでなく、道具などもたくさん使えるようになった 他の人のいいところを採り入れることができた	17	上手にできた
2	持ちものを持たせるなどいろいろ工夫することができた	18	どべをつけたらくっついたのでよかったし、（やり方を）知ったのでよかった
3	楽しくつくることができた こわれたら直すことができた 自分でつくったら最後まで自分ですることができた	19	3年生のときはぼろぼろぼろぼろ落ちていたけど、4年になると全然落ちなかった
4	いろんなものを使ってもようをつけることができるようになった	20	他の人のを見て、アイデアを出し、オリジナルにすることができた これからもオリジナルな作品をつくりたい　楽しかった
5	みんなと学習できたので助け合うことがより深まった	21	想像ができるように変わったのでうれしい つくる楽しさが分かった みんなと言い合いっこができるようになった
6	形づくりでものを持たせる、口にくわえさせることができるなんんて思っていなかった	22	初めはあまり形や模様などこだわらなかったけれど、グルルチュで（こだわれるように）すごく変わったなぁーと思った
7	ひねり出しが前よりもうまくなった バランスと付け足しのこともうまくなった	23	（粘土でつくることに）興味をもった 形の変化がおもしろいと感じた
8	ねじることを覚えた どべや針金を使い、いいグルルチュをつくることができた	24	接着の仕方　表情の出し方
9	想像の動物をダンス、そして、楽しくどこから見ても（美しく）ができるように変わった つけたしタワーとちがい、とれないようにすることができた	25	上手にできた
10	粘土と粘土をつけることができるようになった	26	楽しさは表情だけでなく動作でも表せることが分かった（うごかなくても） ものをつくるとき自分の体にポイントがあることが分かった（例えばうでの曲がりなど）
11	ひねり出したりバランスに気をつけたりできたところ	27	動かなくても表情とかでも楽しさを表現できることが分かった 体にポイントなどがあることが分かった
12	ひねりをうまく使ってつくることができた	28	動きにこだわる自分になった
13	楽しく見せるために持ちものを考えることができた バランスを考えることができた 粘土はいろいろな形に変えることができてすごいと思った	29	自分も楽しみながらするとたのしそうなグルルチュをつくることができることを発見した 表情を詳しく出せるようになった
14	模様をつけたところ　形	30	前のつけたしタワーでは、ぼろぼろ落ちていたけど今回は、1つしか落ちるのがなかった
15	ぼろぼろととれないようになった バランスよく楽しくつくれるようになった	31	つけたしが前よりも上手になった
16	バランスを考えてどこから見ても楽しそうにするために、いろいろ回してたりしてつくることができた		

表10　ダンス！グルルチュ！ダンス！の学習を終えて「変わった自分」を見つけよう！

次に表10の「変わった自分を見つけよう」から、本題材を通して変容した子どもの姿について考えてみる。

「粘土の接着・接合」「想像上の動物のイメージの具現化」「動きづくり」に、変わった自分を見い出している子どもが多い。昨年の経験をもとに「うまく接着・接合できるようになりたい」「自分だけのグルルチュをつくりたい」「楽しい動きを表したい」という強い思いがあったことがこうした変容を生んだと捉えることができよう。また、先の表9の記述よりも、題材全体を概観した記述が多いのは、これまでの自分の取り組みや思い、考えたことを想起したからであると考えられる。

また、表10には、「他のよいところを取り入れてつくることができるようになった」「みんなと学習したので助け合うことがより深まった」「みんなと言い合いっこができるようになった」など、集団で学ぶよさを感じた子どもの記述がある。しかし、この「変わった自分を見つけよう」では記述されていないが、表6や表7をもとに考察したようにほとんどの子どもが、友達の表現から自分なりによさや表し方の工夫を捉え、自らの表現に生かしている。つまり、ほとんどの子どもが、集団で学ぶよさを感じているといえるだろう。そう考えると、本実践を通して、子どもが集団で学ぶよさを感じ、集団で学ぶからこそ自分の表現が広がっていったと捉えることができたといえよう。

ただ、それが、子どもに意識されているかどうかが問題である。自分らしい表現のよさや悩み、ともにつくり上げた喜び、変わった自分は、表現の過程の中に点在している。それをつなぐことで、自らの価値観の広がりや創造性の高まりが明らかなると考えると、集団で学ぶよさを実感することができるような手立てが必要ではなかっただろうか。

意欲的に取り組む子ども

④ 成果と課題

本実践を通して、子ども達が集団の中で意見を交換したり、互いの表現を見合ったりしながら学びをつくり上げようとする姿に迫ることができたと考える。集団で学ぶよさが息づく授業への手立てとして設定した４つの場についても、その設定や構成など改善の余地はあるものの、その有効性を確認することができた。

中でも、子どもにとって全体で共有するめあてをみんなでつくったことは、一人一人の中にそのめあてを意識して造形とかかわろうとする思いを高めることができたのではないかと考える。そして、製作における子どもの姿からは、積極的に造形や仲間とかかわろうとする意欲が多く見られ、「造形に働きかけようとすること」「価値観や表現の多様性を楽しむこと」という本実践で大切にしたいことに近づくことができたのではないかと考えている。

しかし、次に示す３点の課題が浮かび上がってきた。

１点目は、イメージの共有のための手立てのあり方である。本実践では、“ダンス！グルルチュ！ダンス！”という題材名をもとに言葉を媒介としてイメージを広げていこうと試みたが、前述したように言葉のみによるイメージの共有は難しいものがあった。つくりながらイメージを広げていった本題材での子どもの姿から考えると、イメージの共有のために、題材に合わせた「場面の設定」「方法」を考えなければならないのではないだろうか。例えば、つくりながら一人一人のイメージを膨らませ、ある程度製作が進展した状況で場面を設定する。あるいは、実際に音楽に合わせてみんなで踊ったりする直接体験や子どもの発言やアイデアをもとに教師が実際に粘土で形づくったりする間接体験など、体験を通してイメージの共有を図る方法が考えられる。また、バランスやリズムなどの造形的な感覚のよさもどう共有していくかということも合わせて考えていかなければならないであろう。

２点目は、個々のめあてづくりにかかわることである。子どもの設定するめあては、表２や表６にあるように“うでの形にこだわって”“どこから見ても楽しいグルルチュ”といったように、具体的な製作へ向けたものにはなっていない。本実践のような漠然としたイメージを徐々にまとめていくような題材では、特にめあての設定が難しいものになる。個々のめあては製作の指針となるだけではなく、自分の学びの過程をふり返る際の指針にもなる。めあてのあり方や設定の仕方を考え、実践を重ねてよりよいめあてのあり方を探っていきたいと考えている。

３点目は、自己の変容を自覚するための手立てである。本実践では、学習カードや作品をもとに自らの学びをふり返り、変容した自分を見出していくという方法をとった。しかし、子どもが自分の記述から、その時々の思いや感じたことを読み取ることは難しい。教師が読み取り、全体の場に広げていく方法もあろう。しかし、子ども自らが、初めの自分はどうだったのか、どうなりたいと願ったのか、そのために何をしたかなど、学びを通して意識する必要があると考える。これらを意識できる題材の展開や学習カードの位置づけなどこれからさらに考えていかなければならない。

最後に、規範について述べていくことにする。中学年は「認め合い・かかわり合い」を中心に規範意識を高めながら１学期間、学習を進めてきた。クラスでは、前述したように教室の規範を「大切にしたいこと」として子どもとともにつくり、みんなが意識できるように板書や掲示に位置づけてきた。また、それらの「大切にしたいこと」を意識して取り組む姿を認め、全体の場で広めながら、一人一人に規範の意識が育まれるように努めてきた。

本実践では、「造形に働きかけようとすること」「価値観や表現の多様性を楽しむこと」という２点を主に意識する規範と位置づけた。これらの規範は、学習を進める中で少しずつではあるが意識されるものとなったのではないかと考えている。しかし、これらの規範が図画工作科を離れて、子どもが学ぶ全ての場において意識され、その規範をもとに学びが深まっていくことを図画工作科の立場から見取っていく必要があるだろう。逆に、他の学びの場において育まれた規範が、図画工作科の中でも生かされ学びが深まっていくように、他教科との連動を図っていかなければならない。今後は、規範がどの程度意識化され、育まれているかを子どもの実態から見取り、その規範が生かされる題材の構成を考えなければならない。